

意見書

令和7年度 第2回 県立長野図書館協議会

令和8年3月18日

委員 西山 卓郎

はじめに

都合により本日の協議会を欠席することとなり、大変残念です。意見書という形で、私が今感じていることをお伝えできればと思います。

今回の意見書で通底している問いは、本と図書館の差分は何かということです。

この問いは、抽象的に聞こえるかもしれませんが、令和8年度主要事業計画はじめ各書類を読んだ際、この問いが浮かび上がってきました。計画に書かれているのは、本の話だけでなく、人の話であり、問いの話であり、場の話だと思ったからです。

1. 本は、情報蓄積の一形態にすぎない

本を突き詰めれば、情報を蓄積・伝達するための手段の一形態です。粘土板から写本、印刷物、（人間図書館というものも）そして電子書籍という長い流れの中でアップデートを繰り返してきましたが、唯一の形ではありません。

この視点に立つと、本を持っている場所としての図書館の定義は非常に揺らぎのある状態と言えます。デジとしょ信州が示すように、情報へのアクセスはいまや物理的な本を介さなくても成立する。AIや電子書籍という新たな手段が普及する中で、図書館の価値が物理的な蔵書数である考えは、変化してきていると思います。

では図書館は何を届けるのか。

リファレンスをご説明している言葉を借りれば、利用者自身が課題を見つけ、調べ、解決する力を身につけることを応援する事だと考えます。情報を渡すのではなく、どう使うかを共に考える。これは、どんな形の情報蓄積技術が登場しても、陳腐化しない図書館固有の価値です。

だとすれば、図書館の役割は情報そのものを届けることではなく、人が問いを持ち、言葉を獲得し、自ら考える力を育む場所を作ることにあるのではないでしょう

か。さまざまな定義でもこの側面には触れられていますが、今一度、この実践とは何かと向き合うことが必要だと考えます。

2. 県立であることの差分

図書館の中でも、県立であることの意味をあらためて問い直したいと思っています。

全国的に見ると、市町村図書館の充実とともになぜ県立が必要かという問いへの答えを持っていない県立館は少なくありません。

その点、県立長野図書館はデジとしょ信州・MLA 連携・信州デジタルコモンズ・信州ナレッジスクエアといった実践を通じて、市町村単独ではできないことを束ねるという県立の役割を着実に体現しています。

これは本を多く持っているという量の優位ではなく、ネットワークの結節点になれるという構造的な差分です。

長野県 eLibrary 計画によるデジタル化・ネットワーク化の推進が示す方向性は、まさにこの強みを制度として育てようとするものと読めます。デジタルと空間とネットワークを融合させ、県民の学びを支える基盤をつくることは、県立長野図書館にしかできない役割です。

今後さらに重要になるのは、この機能を単発事業に終わらせず、制度として定着させることだと思います。電子書籍パイロット校支援も、単年度プロジェクトで終わらず、県立図書館が学校教育に関わる当然のインフラとなるような中長期的な設計を期待します。

3. 場の差分 共に考える空間としての図書館

共知・共創をコンセプトとする信州・学び創造ラボ、学びの成果をアウトプットし試行錯誤できる場所としてのモノコトベース、体験の貸出、これらはいずれも、既存の本を貸すことの延長線上とは一見すると接続しないように見えます。

ですが、本がインプットの手段だとすれば、図書館はインプットとアウトプットの間にあるプロセスを行う空間と言えそうです。本に限らず何かを受け取るだけでなく、受け取ったものを誰かと考え、形にしていく。その過程を支える場所。

この場の差分を、改めて言葉に落とすのと同時に、場としてのより一層の実践を期待します。実践していく中で、全てを図書館職員が行う必要はないと思います。そ

ノコトベースのコミュニティが出来たように、プロセスを開くことで、新たな関わりや出会いの創発を起こすという目線で運営を行えたら、とても良い共に知り、共に創る広場として動いていくと考えます。

4. 差分を守るための言葉を持つ

資料を読めば読むほど、置かれた構造的な厳しさが見えてきました。資料費の長期的減少、固定費の増大、これらは単年度の努力では解決できません。

だからこそ、数字の議論と並行して、それでも何を守るのか、何を行い、何をしないのかという理念の議論を続けることが不可欠だと思っています。

予算が厳しくなったとき、削られやすいのは効果測定しにくいものです。蔵書の効果？レファレンスの質？安心していられる場所？職員の専門性？アーカイブの意義？これらは数字に出にくいですが、これらこそが本と図書館の差分の実体であると考えます。

KPIを貸出冊数、来館者数からより複合的な指標へ転換すべきだという議論も、突き詰めればこの問いに行き着きます。何を測るかは、何を大切にすかの表明です。この指標を持てるかどうか、県立長野図書館の自己定義の問題でもあります。

この協議会が、その言葉を生み出し続ける場であってほしいと願っています。

AIの時代に、図書館の差分が問われる

AIを日々活用する中で、ひとつのことを痛感しています。言葉として知らないことは、入力できない、ということです。

AIは思考の拡張装置です。問いの質がアウトプットの質を決める。そして問いの質は、持っている言葉の豊かさに直結している。検索ワードを思いつけないと検索できないのと同じように、概念を持ってないとAIに問いかけることができません。

これはつまり、問いや言葉を持っているかどうか、これまでとは比べものにならないほど大きな差として顕在化する時代が来るということです。情報へのアクセス格差は、AIによって解消されるどころか、むしろ拡大するかもしれない。

この未来を想像したとき、図書館と本の差分の問いが、まったく別の切実さを帯びてきます。

本は情報蓄積の一形態です。でも図書館は、人が言葉を獲得する場所であり、問い

を立てる楽しさを知る場所であり、誰もが自由に問いを持ち、知り、実践するための基盤でありうる。AI という思考の拡張装置が社会に広がる中で、図書館はそのインフラとして、今まで以上に重要な役割を担うはずです。

次回こそ出席し、直接話し合いに加われることを楽しみにしています。

以 上